

2025年度 神奈川県青少年訪中団派遣事業

2025年10月26日（日）～31日（金）

『青少年訪中団派遣に参加して』

参加校（50音順）

大西学園高等学校・カリタス女子高等学校
公文国際学園高等部・自修館中等教育学校
聖光学院高等学校・清泉女学院高等学校
洗足学園高等学校・橘学苑高等学校
桐蔭学園高等学校・三浦学苑高等学校
横浜女学院高等学校・横浜清風高等学校



主催：神奈川県日本中国友好協会
神奈川県私立中学高等学校協会

『中国訪問を終えて』

ネオンが輝く高層ビル、広い車線を走り抜ける無数の車。目に映るすべてが新鮮で、桁違いのスケールにただ圧倒されました。中国で過ごした刺激的な6日間で自分の目で見て、肌で感じたことは、私の価値観を大きく揺さぶるものでした。最後の夕食会で思わず涙が込み上げてきたあの感情を、今でもうまく言葉にできません。けれどそれは確かに、自分の中にあった偏見と、価値観の劇的な変化に気づいた瞬間でした。

これまで私が抱いてきた中国のイメージは、ほとんどが日本のメディアによって形作られたものでした。メディアが事実の“すべて”を伝えることは不可能であり、ときには意図を持って切り取られた情報によって印象が歪められてしまうこともあります。小さな誤解が気づかぬうちに大きな溝を生み出してしまう、その現実を痛感しました。

「悪」を作り、そこに批判を集中させることで得られる一体感は、安心のようでいてとても脆いものです。だからこそ国と国、人と人が互いを理解し、友好関係を築こうとするその“過程”には、何にも代えられない価値があるのだと思います。

そして今回、私は初めて「夢を口にする勇気」を持つことができました。交流先の高校生たちが、自分の夢を堂々と語る姿は本当にかっこよく私もそうありたいと心から思いました。これからは自分の夢を言葉にして宣言していきたいと思います。私は日中、そして世界をつなぐ外交官になりたいです。この体験が確かな成長につながったと言えるよう、これからも努力し続けたいと思います。

関わってくださったすべての皆様、本当にありがとうございました。

『言葉を超えた交流』

今回のプログラムを通じて多くのことを学び、これまでの自分の考え方や視点が少し変わるような貴重な機会を得ることができました。中国に行くのは初めてで、最初は分からぬことも多く不安でしたが、現地の方々とお話しするうちにその不安は次第に消え、とても楽しい時間を過ごすことができました。普段では体験できないことも多く、非常に貴重な経験となりました。

特に心に残っているのは、最終日に行った買い物の際のことです。探していた商品が見つからず店員さんに尋ねたところ、英語が通じなかつたため、翻訳機を使いながら会話をしました。翻訳に時間がかかってしまいましたが、店員さんは終始優しく対応してくださいり、商品についても丁寧に説明してくださいました。この経験を通して、言語が通じなくても気持ちや誠意は相手に伝わるのだと強く感じました。

また、現地の学生との交流から多くの学びがありました。日本の言語や歴史に興味を持ち、積極的に学んでいる姿を見て、私ももっと多くの国や歴史について学び、理解を深めたいと思いました。

『瀋陽で広がった世界』

瀋陽への派遣事業は、私にとって初めての中国でした。文化の違いに戸惑わないか、言葉が通じるか不安でしたが、現地の人と交流するうちに、その不安はすぐに楽しさへと変わりました。言葉が少ししか分からなくても、身ぶりで気持ちが通じたことが、とても嬉しかったです。

世界遺産である瀋陽故宮や、中国最古の商店街「瀋陽中街」などを訪れました。写真で見るだけでは分からなかった中国の長い歴史を、実際に目で見て感じることができました。食事も日本とは違って、新しい味との出会いがたくさんあり、印象に残りました。

この6日間を振り返って、世界にはまだまだ私の知らないことがあると気付きました。そして、国や言語が違っても、心はつながることができると学びました。この経験を大切にして、これからも視野を広げ、いろいろな世界を知っていきたいです。

『遼寧省で感じた“本当の中国”』

私は今回の中国遼寧省派遣事業で、多くの学びと貴重な経験を得ることが出来ました。初めての海外旅行ということもあり出発前は不安と緊張の反面、とても楽しみでした。実際に自分の足で中国に行くと、刺激になることが多くて驚きました。

一つ目は遼寧省の街並みについてです。街では高層ビルが並ぶ一方で市場や伝統的な建物も残っていて中国の急速な発展と豊かな歴史が共存していることに驚きました。全体的に日本と比べて建物が大きく、とにかく派手でした。街並みがカラフルで景色がとても綺麗で良い刺激になりました。

二つ目は食文化についてです。料理は日本で出てくるような中華料理ではなく、見た事の無い中華料理がずらっと並んでいました。見た目は日本と似ていましたが、味や香りは日本では感じられない風味で初めての感覚でした。

三つ目は現地の人々と交流した事についてです。私が思っていた以上に皆さん勉強熱心でとても尊敬しました。日本に興味を持ってくれて、日本のことや文化を知ってくれている事がとても嬉しかったです。自分にはなかった視点や価値観に触れることができ視野が広がりました。

中国はニュースで見るような印象が強かったですが、実際自分の目で見て感じて中国に対する印象が180度変わりました。今回の旅を通して中国との関係をもっとより良くしたいと心から感じました。貴重な機会を提供してくださった関係者の皆様に感謝申しあげます。今回得た学びを忘れず、これからも積極的に新しい世界へ踏み出していきたいと感じました。

『青少年訪中団派遣に参加して』

まず遼寧省瀋陽市に到着し空港に降り立ち、ホテルまで移動をする際に何よりもその発展度合いに驚きました。高層ビルが立ち並び、そのビル群にスクリーンがあり、さらにビルそのものがライトアップされていて想像より圧倒的に発展していました。

翌日ホテル周辺を散歩していたら少し進んだところに市場があり、牛が丸々解体されていてそのまま販売されているなど日本ではまず体験できないような奇想天外な出来事にたくさん出会いました。そのようなギャップに溢れていてとても魅力的な都市だと訪れて感じました。

個人的な体験談だけでなく、カリキュラムも非常に充実していました。最初に訪れた瀋陽師範大学、そして東北育才外国语学校、鞍山師範学院の3つの学校でいかに学生の方々が日本に興味を持って頂いているのか、いかにオープンマインドなのかを、ただ中国に訪れただけでは体験できないような学生間交流という形で理解できました。

それ以外にも鞍山市に訪れたり、瀋陽故宮に訪れたりと遼寧省の文化に直接触れる機会が数多くあり、訪れた各地でただの旅行ではない非常に貴重な体験ができ、有意義な時間になりました。

そして私自身、初海外でしたので、異国の中で何かトラブルに巻き込まれないのか、本当に安全なのかななど、不安がたくさんありました。ただ実際中国に訪れて、それらの不安がいかに杞憂であったのかを実感しました。会計を助けてくれたり、日本人だからと嫌な顔を一つせず接してくれたり、優しい人ばかりで感動しました。実は、訪中前に本当に大丈夫なのかと言われるなど、様々なマイナスイメージが取り巻いていましたが、そのような意見がいかにステレオタイプであったのかを理解しました。自分を取り巻く環境から殻を破ったような旅になれたことが、自分の成長にもつながりました。ぜひ、この実際に訪れて体感した本当の中国を発信したいです。

最後になりますが、訪中の際に関わってくれた中国の現地の方々、中国の学生・先生方、ガイドの方、引率の先生方、旅の計画をしてくれた方々、そして一緒に訪中をしたメンバー等、非常に「人」に恵まれた旅となったことに感謝します。



『瀋陽で見た未来と友情』

この度、青少年訪中団の一員として瀋陽を訪問し、人生の糧となる得難い経験をさせていただきました。

現地に到着してまず圧倒されたのは、社会の隅々にまで浸透したテクノロジーと、その利便性の高さです。注文からわずか9分で届くデリバリー、端末に手をかざすだけの「手のひら決済」など、日本では考えられない光景を目の当たりにし、中国の急速な発展を感じることができました。

しかし、それ以上に深く心に刻まれたのは、現地の東北育才外国学校の生徒たちとの交流です。言葉や文化の違いはあれど、同世代として笑い合い、夢を語り合う姿に隔たりはありませんでした。「国籍が違っても、人間の根幹は変わらない」と理屈ではなく心で実感できることは、私にとって最大の発見であり、一生ものの体験だったと感じます。

また、滞在中は遼寧省政府の方々に心尽くしのおもてなしをいただき、瀋陽の歴史と文化を深く味わうことができました。このような貴重な機会をくださった貴協会、そして温かく迎えてくださった現地の皆様に心より感謝申し上げます。この経験を原点とし、日中、そして世界の友好の架け橋となれるよう努めてまいります。

『青少年訪中団派遣に参加して』

私が今回の瀋陽に訪れてまず驚いたのは、中国の学生たちの学習環境の厳しさです。朝6時から夜10時まで学校があり、宿題が終わらなければさらに勉強を続けると聞き、人口の多さと受験競争の厳しさを実感しました。この経験から、日本で学べる環境のありがたさを改めて感じました。

また、相手の学生から「日本で最近のニュースはどう?」と質問されました。中国では日本についてあまり良くないニュースしか報道されない中で、日本人の目線で教えてほしいと言われ、驚きとともに嬉しさを感じました。報道や政治の印象とは別に、国民同士は互いに理解しようとする姿勢を持っていることに気づきました。

瀋陽の街や博物館を見学して、都市の発展の速さにも圧倒されました。巨大な建物や高速鉄道、整備された世界遺産の景観から、経済やインフラの急速な進歩を実感しました。一方で、道路や一部の施設に格差が見られ、発展の裏には課題もあることを理解しました。現地の人々は私たちが中国語を話せなくても、ボディーランゲージや英語を使って積極的に交流してくれ、その温かさにも触れました。

今回の訪問で、現地で自分の目で確かめることの大切さを学びました。体験し、話を聞き、比較することで、単なる情報では得られない理解や気づきが得られました。また、日本で普通だと思っていた学習環境や選択肢の自由がどれほど恵まれているかも実感し、今後は積極的に新しいことに挑戦していきたいと考えています。

『青少年訪中団派遣に参加して』

今回、私は神奈川県青少年訪中団派遣事業でいただいた機会を通して、中国・遼寧省で多くの貴重な体験をすることができました。私が中国を訪れたいと思ったのは、小学生の頃から三国志など中国の古典に興味があり、ぜひ一度憧れの中国に訪れてみたいと思っていたことがきっかけでした。また、昔の中国は本や古典を通して知っていましたが、今の中国や人々と実際に出会い、今の中国を交流を通して知りたいと思いました。

訪中団では、現地の瀋陽師範大学や鞍山師範学院の大学生、現地の高校生と交流する機会が多くありました。私はたくさんの現地の学生と交流する中で、訪中団の学生と現地の学生が様々な文化を共有し合っていることに気付きました。例えば、私は幼い頃から書道を習っており、中国の臨書もたびたび書いていました。私が交流の際に自分の作品を見せたとき、「凄い！」と褒めてくださったり、作品の中国語を読んでくださったり、話が盛り上りました。大好きな中国の歴史についても一緒にお話しすることができ、とても有意義な時間でした。その他にも、私の友人が現地の大学生と中国のゲームについて熱く語り合っていたりして、私たちが多くの文化において繋がりがあることを知りました。

また、中国滞在中にちょっとしたハプニングも経験し、ホテルのトイレを一日で二度も詰まらせてしまうがありました。さらに、二回目に詰まらせたときは夜遅くで、その上中国語も流暢に話せないので、少なからず嫌な顔をされるなと思っていました。しかし、スタッフの方は夜遅くの対応だったにもかかわらず嫌な顔一つすることなく笑顔で対応してくださいり、翻訳機で会話しながら、「これでトイレを使うことができます」と翻訳機を通して伝えられたときには、安心感でいっぱいになりました。

その後、東北育才外国语学校での高校生による日本語スピーチで、ある高校生が言語が通じない中で助けてもらえた経験を通して、「言葉が違っても、人には優しく温かい心を持っていて通じ合うことができる」と話していました。そのスピーチが私の中でホテルでの経験と重なり、言語が異なっていても人は優しさを共有できることや、言葉が通じない環境で親切にされたときの安心感を改めて実感しました。

私は、今まで国や歴史など大きな単位で外国のイメージを一括りにしていました。しかしこの訪中団での経験を通して、個人と向き合う重要性に気づきました。中国を訪れて、優しい人々にもたくさん出会うことができた一方で、スーパーのレジで早口の中国語に対応できず恥ずかしくなるなど、思い通りにいかないことや文化の違いを感じることもありました。けれども、それは外国にいるから感じることではなく、日本でも他人との価値観の違いを経験することもあるので、必ずしも中国に限った話ではないのかなと思いました。ましてや、私が今回出会った人や日本の報道やSNSで流れる人は、あくまで十四億人もいる中国の人々の1%にも満たないと思うと、人種や国籍で先入観や偏見をもつのではなく、一人一人との出会いや縁に感謝して向き合うことの大切さを痛感しました。

訪中団で頂いた経験は私にとってたくさんの視点や考え方を与えてくれた機会でした。また、交流の中で出会った大学生の方とは帰国した今でも連絡を取っていて、中国の史記などの古典文学や日本のアニメやサブカルチャーについてお話しすることができます。中国で得られた経験や人との縁を自分だけに留めず、家族や友人に訪中団での経験を話し共有することで、中国の方々と多くの縁を頂いた私が、今度は他の人と中国との縁を結ぶ側になりたいです。

『この経験は何にも変えることのできない宝物』

不安、緊張、期待が入り混じる中、私は2025年10月26日から6日間、日中友好協会訪問団として中国を訪れた。空港に到着すると、中華街を思わせる空港の匂いと外事弁公室の方々の温かい歓迎に、緊張がゆっくりほどけていった。

3日目には高校を訪問し、日本語スピーチと交流を行った。現地の高校生の流暢な日本語と表現力、堂々とした姿は同年代とは思えないほどで、強い刺激を受けた。交流では、日本と中国のお菓子を食べながら会話し、日本語を学んだきっかけがアニメだと聞き、日本文化が海を越えて届いていることに嬉しさを覚えた。また、分からぬ言葉をすぐに調べる勉強熱心な姿は心を動かされた。

6日間、外事弁公室の方々は朝早くから夜遅くまで、安心して楽しめるよう私たちを支えてくれた。最終日の空港では別れが惜しく、涙が溢れた。短い期間ではあったが、中国という国の温かさに自分が知らないうちに触れていたことに気がついた。

私は、この訪問の話を聞いた時勇気を振り絞って応募した自分を誇りに思う。私が今回経験したことはどこにも手に入ることのできない宝物だ。今回の貴重な経験をくださった日中友好協会の皆さんに深く感謝申し上げます。

『中国での新たな経験と気付き』

僕は今回の中国研修で数多くの貴重な経験をすることができた。僕が今回の研修に参加する前は、自分が中国に対してあまり良くないイメージを持っていたこともあって、現地に馴染めるのか、現地の人と交流することができるのかと不安だった。

しかし、瀋陽で過ごしているうちに、そのイメージや不安は変わっていった。

その要因の1つには中国の「広さ」があった。研修中、バスを使うことが多く瀋陽の街並を見る機会が何回もあった。その際に僕は中国と日本の広さの違いを実感することが出来た。中国は道路が広いために、多くの高層ビルが並んでいても都会特有の息苦しさや狭さを感じることがなく快適で、僕が持っていた中国の息苦しく暮らしづらいイメージとは違っていた。

2つ目の要因に現地学生との交流がある。2日目、3日目、4日目は瀋陽の現地の高校、大学を訪問した。その際に現地学生との交流会があり、そこで英語を使って交流をした。僕は違う国的学生と交流をするのは初めてで不安だったが、僕の拙い英語でもちゃんと学生とコミュニケーションを取ることが出来て、楽しく、嬉しかった。

この研修を通して、僕は自分の中にあった固定観念を見直し、新しい視野を広げることができた。この経験を活かして他の国との交流をしてみたい。

『青少年訪中団派遣に参加して』

この旅に依って、私は以前から考えていた信念を確固たるものにすることができました。

私が今回の旅において、最も深い感銘を受けたのは、五日目の夜、瀋陽の餃子専門店で夕食をとった時分のことです。明日には帰国ということもあり、生徒のみならず、同行していた先生方、遼寧省の現地政府の担当の方々、各々が感想を発表していました。

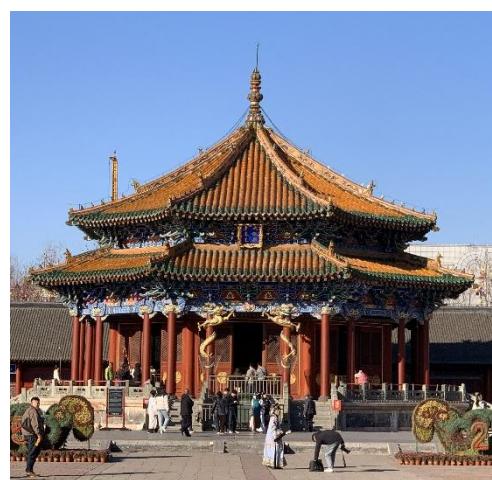
私は大したことは言ってないのですが、他の生徒達の感想を聞いていると、内容が似通っていると思う部分がありました。それは、この旅を通じて、偏見に依って知っていたことと、実際に見て知ったことでギャップを感じたということでした。中国に対しては、その治安や政治情勢などに否定的な印象を持たれがちですが、その印象が今回で覆った、そういう感想が多く見受けられました。

そのような中で、現地政府の担当の方が、それらの感想をまとめた上で次のように話しました。

「差別や偏見を乗り越え、インターナショナルな人となれば、自分たちにとってありえない事柄であっても、合理的に見える」

この一言が、私の中で、この旅が人生上において有意義なものとなった瞬間でした。私は、よく幸福について考えているのですが、そして、考え方の結果、寛容と柔軟性とが、幸福を形作る核となるのではないかという仮説をたてました。驚いたことに、先述の担当の方の言葉は、この、寛容と柔軟性という内容に見事に当てはまっているように思いました。そのように考えると、単に、個人の内面として描いた寛容と柔軟性とが、地域の垣根を越え、全ての人々に対して通用する———この発見を得られたこと、これこそが私の今回の旅の意義であり、学んだことだと思います。

余談となりますが、元来、私は海外は勿論、飛行機に乗ったことすらありませんでした。それゆえ、1日目から最終日まで、甚だ新鮮で、内容の濃い旅であったように思います。そのような貴重な経験を積むきっかけを頂いた両親と桐蔭学園には感謝をしています。また、私の最も有意義な学びを得るために助けとなつたのは、遼寧省政府や、同伴の先生方、そして共に旅をした仲間や、慕ってくださった現地の学生方です。これだけの多くの方々が協力していたことに深く感謝するとともに、この機会を必ずいかし、胸を張って生きていこう、そのように思います。



『青少年訪中団派遣に参加して』

私は 2025 年 10 月 26 日から 31 日まで、中国遼寧省への訪中団に参加させていただきました。約 3 時間飛行機に乗り、中国にはじめて降り立ったときに感じたことは、建物の大きさや広告看板一つにしても規模がとても大きいということです。都市の広さと勢いを目の当たりにし、日本との違いを強く実感しました。

夜になると、ビルが色鮮やかにライトアップされ、街は昼間と変わらないほど明るく輝いていました。また、歴史的な建造物を見学した際には、その壮大さに圧倒され、大陸ならではの歴史の重みを肌で感じました。

日本では中国に対して否定的なニュースを耳にすることが多いため、少し不安もありました。しかし、実際にお会いした中国の方々はとても優しく、言語がうまく通じなくても、諦めずに身ぶり手ぶりを交えて話しかけてくださいました。町を歩いていたときには、知らない人が笑顔で「どこからきたの？」と声をかけてくれ、その温かさがとても印象的でした。また、中国人学生の日本語力の高さにも驚かされ、私自身が中国語を話せないことを恥ずかしく感じました。

この訪問を通して、私は中国に対する考え方方が大きく変わりました。自分の目で見て、人と直接交流することの大切さを学びました。これからは中国の言語や文化、歴史をより深く学び、自分の視野を広げていきたいと思います。今回の経験は、私にとって忘れられない貴重なものになりました。

『人は悪事しか耳にできない』

日本人の持つ中国のイメージとして、民度が低い事がよく挙げられる。

悪事ほどよく伝わるというのもあるが、直近でも奈良の鹿などが問題になっている印象がある。私も中国に行く際は、ある程度報道でバイアスがかかっていることを加味しても、中国全体の民度は信用しきれないものがあると考えていた。

中国の観光に付き添ってくれた遼寧省の方々はとても親切にしてくださったが、中国人が全員悪人などとは考えていないので、中国に対する見方は大して変わらなかった。

しかし、帰国前日の昼食に行ったファミレス的な火鍋屋で予想だにしないものを見た。そこでは火鍋屋の席が空くのを待つお客様に対してちょっとしたスナック菓子を配っていたのだが、それは店員の見えないところにカゴに入れられて置かれていた。

私はこれにとても驚いた。

別に大した価格ではないだろうが毎回毎回盗られるようでは菓子を置くわけがないので、逆説的に菓子を置いたことで特に問題が起こっていないことがわかる。

ほかにも中国に行って想像よりも民度の良さを実感した。

我々が知り得る情報はどうしてもネガティブなものが過多になる以上、変に調べるよりも自身で体験することこそが最も重要である。

『3つの出会い』

私は今回の訪中団で特に大切な3つの出会いを得ました。

1つ目は、他校の高い志を持つ高校生たちとの出会いです。今回の訪中団には私を含めて20人の高校生が参加しており、その皆が高く立派な志を持つ人々でした。普段校外の方と関わる機会が多くないので、同年代の異なる環境で過ごす人と交流することは私にとって新鮮な経験であり、また積極性をもって中国の方や他の生徒の皆様に話しかけておられる姿は普段他の人に話しかけるときに怖気づいてしまう癖のある私に大きな刺激をくれました。その出会いにより、私は様々なことに積極性を持つことの大切さを学びました。

2つ目は、現地の人々との出会いです。日本国内には、現在のやや緊迫した日中関係などの影響で、中国に対する悪印象を抱いている人が多くいます。今回の訪中団参加を周囲の知人に伝えたとき、多くの人は「中国に行くのは危なくないのか」などといった、歪んだ中国観に基づいた心配の言葉を私に掛けました。私自身は特段そのような意味での悪印象は強くなかったですが、やはり慣れない海外に行くということで様々な不安を抱えていました。しかし、それらは杞憂に過ぎませんでした。中国に滞在した6日間で、一つ非常に考えさせられる出来事がありました。自由行動の日、私は現地のスーパーマーケットに行きました。しかし、そこでは当然ながら日本語や英語は通じず、本当に一切言葉の通じない環境に置かれました。その中でジェスチャーを使いつつどうにか買いたいものをすべて見つけてレジに持つていこうとしたとき、問題が発生しました。キャッシュレス化の進んでいる中国では、ほとんどのレジで現金が使用できなかったのです。そこで、店員の方に必死で説明し、どうにかレジに案内していただいたことで安堵すると、さらなる問題が発生しました。どうやら伝えたいことにすれ違いが発生していたらしく、私が案内されていたのは会員専用レジだったのです。言語も通じず、どうにもならず買い物を諦めかけたとき、偶然後ろに並んでおられた方がスッとスマホを店員の方に差し出してくださり、会員証提示をクリアーすることができました。この出来事で、私は言語を使えない状況でのコミュニケーションの難しさとどこに行こうと変わらない人の優しさを痛いほどに感じました。

3つ目は、足りない部分のまだまだ多い自分自身との出会いです。今まで、自分の他者に対する先入観や普段とは全く異なる環境に置かれたときの自分の振る舞いは知ることはできませんでした。しかし、この6日間のプログラム中、私はうまく人と話せない自分や中国の方に対する偏見を持っている自分と何度も向き合わされました。これらは、普段通りの学校生活をただ送っているだけでは気がつけないものたちでした。

今後、私はこれらの3つの出会いと教訓を胸に、今回気がついた足りない部分を埋めていく努力をしたいと思います。

『6日間が教えてくれたこと』

「国は違えど、誰もが平和を願っていて平和のために自分達のやり方でそれを実現しようとする」これは今回の訪中団で実際に中国の遼寧省瀋陽市に行って、私達と帯同してくれた現地の政府の人が日本に帰国する前日に仰っていた言葉です。

私は中国に行くのが初めてで、6日間その地を体験してきました。そして私はこの言葉を聞いて日本に帰国した後、訪中団で体験したこと感じたことを整理しました。それらを整理する過程では、旅での思い出、政府の人が話してくれたことを振り返りました。また「人の出会いは500年に一度のすれ違い」だと、もう一人の政府の方が教えてくれました。私はそのすれ違いで見つけた現地の大学生とSNSを通じて話したりしました。そうして私は数日間かけてうまく言語化することができました。

それは外国に行ったとして、自分が理解できない、驚く様なこともあるけれど、他国は他国なりの方法でバランスを取っています。私は中国に行って日本とのたくさんのギャップを感じました。しかし、それらのギャップを「嫌だ、意味がわからない」のようなネガティブな捉え方をして、自分のやり方を押し通そうとするのではなく、「この人たちこうするんだ」とリスペクトする。人間の理解には限界があると思います。なぜなら、人は一人ひとりに文化、背景があるからです。個人によって感じること、身の回りに起こることは違います。しかし、理解できなくても理解しようとする姿勢がとても重要なと感じました。

「郷に入っては郷に従え」という言葉があります。私はこの言葉の意味、重みをこの訪中団を通して感じることができました。理解はできなくても心に留めてまずは考えようとする、その姿勢こそが世界中の人々が幸せになれる第一歩だと思います。

『青少年訪中団派遣に参加して』

私の周りの人たちは、中国に対してあまり良くない印象や偏見を持っている人が多く、それが何故なのかずっと疑問でした。なので実際に中国へ行き、この目で見て、感じたいと思い、訪中団に参加しました。

初めて訪れた中国は、日本と違い何もかもが大きく、外の建物は色鮮やかな電気で彩られていてとても美しかったのを鮮明に覚えています。そんな美しい建物や風景に囲まれながら食べる本場の中華料理は、今まで食べたどの中華料理よりも美味しいものでした。また、建物や風景だけでなく、現地の人たちの温かい心にも感動しました。現地の学校で関わった人はもちろん、店員さんや掃除をしている人までもが優しく、私が困っている時に言葉が通じない中でも中国語を交えながら身振りで教えてくれたのがとても嬉しかったです。

私が実際に見て感じた中国を学校や家で話すと、殆どの人が中国に対して抱いていた印象が良いものに変わったと言ってくれました。なので、これからも自分が疑問に思ったことは自分の目で実際に確かめたいと思います。そして周りの人にも共有したいです。

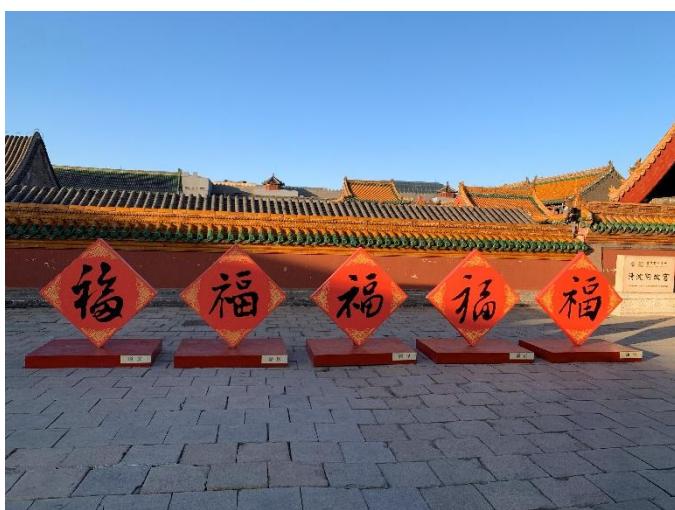
『瀋陽を訪れて得た教訓』

今回瀋陽を訪問したいと思った動機は、観光をしながらおいしい料理が食べられる楽しい旅行に行きたい、という恥ずかしながらその程度の消極的なものに過ぎなかった。しかし、瀋陽について空港からホテルへと向かうその僅かな道のりの間に自らの姿勢がいかに甘かったかを痛感させられた。林立する高層ビル群、煌々と光るサイネージ、激しく行き交う車、それらのどれも東京とは比較にならないほどの規模であり、強い衝撃を受けた。

それからの一週間は初めて目にすることや耳にすることが続き、絶えず驚きや発見があったが、とりわけ印象的であったのが現地の学生との交流であった。育った環境が全く違う同級生と話すというのはとても新鮮で、お互いに共通の話題を見つけ出そうとさまざまな話をしようと試みるも言いたいことがなかなか伝わらず、ようやく伝わった内容も相手に馴染みのない話題であることが多く、かなり苦戦をした。

このまま十分な交流もできないまま時間だけが過ぎていってしまうのではないだろうか、と焦燥感に駆られながらなんとか打ち解ける糸口を見出せないかと、勉強が大変だという話題を持ち出してみた。すると、すぐに相手も力強く頷き、いかに勉強に追われているかということを話してくれた。その時、僕はただ中国の人と喋っているというのではなくて、同じ高校生と喋っているのだということにそこでようやく気づくことができ、場の空気もこれまでの「日中高校生交流会」から「クラスメイトとの休み時間のおしゃべり」のような和やかなものに変化し、それからは楽しくおしゃべりをすることができた。

このプログラムで僕は、おいしいご飯を食べながら観光するという当初の目標を十分に達成するだけでなく、自分が普段いる場所とは全く異なる環境に置かれると、普段と違うところに目が行きがちでそれ故に苦しさを感じることもあるが、そこであえて普段と同じところを探してみると、スムーズにことが運んだり気持ちも落ち着けられたりするという知恵も得ることができた。このような貴重なプログラムを企画・運営してくださったすべての方々に深く感謝申し上げたい。



『青少年訪中団派遣に参加して』

私は6日間中国の研修に参加しました。研修に参加する前の私は、中国に対して、「怖い国なのではないか」「悪い人が多い」など強い偏見を持っていました。しかし、その情報や偏見は正しいのかを、自分の目で確かめたいと思い、この研修に参加しました。

私が訪れたのは中国の遼寧省で、実際に現地で過ごしてみると、想像していた中国とは大きく違っていました。現地の人は優しく、言葉が十分に通じなくても、笑顔で歓迎してくれました。その度に、出発前の偏見や不安が少しづつ消えていきました。

他には生活面での多くの違いに驚きました。特に印象に残って居るのは、トイレや食文化の違いです。日本では当たり前だと思っていた設備や習慣が、中国とは違い、最初は戸惑いました。しかし、その土地の奥深さを感じることが出来ました。

この研修を通して、「百聞は一見にしかず」という言葉の意味を強く実感しました。ニュースやインターネットだけの情報では知ることができない、自分で実際に現地に行き、自分の目で確かめ、体験しなければ分からないうことが沢山あるのだと分かりました。しかし、6日間で見た中国は、広い土地のほんの一部にすぎません。遼寧省だけではない、中国の魅力を他にも知りたいと感じています。そしてこの気づきは、中国だけではなく世界中の国や人々にも当てはまることがあります。

この経験を活かし、多様な文化を理解し、それを発信し、受け入れられる人間になりたいです。

『青少年訪中団派遣に参加して』

今回の訪中団では、多くの方々に支えていただき、無事に参加し学びを深めることができました。日本では中国に対して誤解されることもあると聞きますが、実際に現地で触れた温かさや優しさ、そして人としての面白さにたくさん触れ、やはり行ってみないと何も現実はわからないと思いました。

現地政府の担当の方から「出会いを大切に」というお話を伺った際、その言葉はまさに今回の経験そのものだと胸に強く刻まれました。もう一人の担当の方には、身分証の制度や質問への丁寧な回答など、学びの機会を多くいただきました。現地の高校や大学でも多くの学生と交流し、友人をつくることができたことも、大きな財産です。

また、団長をはじめとする日中友好協会の皆さま、そして引率の先生方には、安全面から日程調整まで細やかにご配慮いただき、心から感謝しています。共に訪れた日本の高校生たちとも助け合いながら時間を過ごし、一生つき合える仲間ができました。

私は将来、紛争地域や難民支援の現場で働きたいと考えていますが、今回の訪中団はその思いをより確かなものにしてくれました。今回の経験は「感謝」と「出会い」という言葉に尽きます。本当にありがとうございました。

ぜひまた機会がありましたら、またよろしくお願ひします！

『初めての中国が教えてくれた大切なこと』

私がこの訪中団派遣事業に申し込んだ理由は美味しい中華料理を食べたいからという理由です。将来に繋がるからなども考えていましたし、何か目標があったわけでもなく、ただ美味しい食べ物が食べたいという小さな理由でした。

訪中団派遣事業への参加が決まり、色々中国について調べているうちに一つの疑問ができました。それは日本人が中国人を好いていないことです。中国人とのいざこざで亡くなってしまった方や傷つけられてしまった方のニュースを見て日本人が中国に対して全てにおいて良くない印象を持っていることが私には理解ができませんでした。私たち日本人は大半の人が中国人に直接害を加えられていないはずなのに一部の良くないニュースで中国は悪い国でそこにいる中国人は悪い人たちだというレッテルを貼り付けていた日本人を見て心が苦しかったです。

この問題は私一人で解決するのは難しいと思いました。でも私だけでも中国の良さをわかりたいと思うようになり、訪中団派遣事業に参加する大きな理由を見つけました。

初めて中国という所に親なしで来て、言語も分からず不安しかなかったです。けれど優しいガイドさんや中国に悪い印象を持っていない仲間と出会えました。参加者全員がそれ違う理由で来ていましたが、みんな日本と中国の仲を良くしたいという強い思いを持っている同志でした。

私はこの5泊6日で旅の参加者達と共に日本では体験できない沢山の経験をしました。特に世界遺産である瀋陽故宮では昔の中国について沢山知ることができました。ここでより深く中国を知ることができたと思います。印象に残っているのはこの故宮に書いてある言葉です。日本語では「紫氣東来」と書いて、いいことが起こる前兆という意味です。当時の中国では紫は皇帝や高貴なものを象徴とする色で、「紫氣東来」は紫色のオーラが東の空からたなびいてくる、つまりいいことが東の空から流れ込んでくるということで幸運の前兆という意味を持っています。私はこの話を聞いて中国語には深い意味もあり、とても綺麗な言葉だと思いました。このような些細な言葉で私の心は動かされ中国語を勉強してもっと沢山の綺麗な中国語を知るという新しい夢もできました。この旅を通して中国についての理解が深まり、沢山の心優しい中国人に出会えて心の底からこの事業に参加して良かったと思いました。

私たちがこのように沢山良い経験ができたのは神奈川県日本中国友好協会の方々や中華人民共和国遼寧省人民政府の方々、神奈川県私立中学高等学校協会の方々、そして中国で交流する機会を作ってくださった各学校の方々、その他にも旅行会社の方々や費用を出してくれた親など、沢山の大人が頑張ってくださったおかげです。たくさんの大人の頑張りで得られた貴重な経験と、親元を離れ海外で濃い時間を過ごした仲間との出会いは何があっても忘れられない思い出です。この旅のおかげで私は色々な成長ができ、一歩大人になった気がします。この旅で経験したことや中国について、中国には沢山いい人がいることを色々人に伝えられるように頑張ります。この度は素敵なお旅を用意してくださってありがとうございました。